

たじひのだより

No. 21

特集 松原市の新しい指定文化財

丹南・来迎寺

融通念佛縁起絵巻



融通念佛の教えを広めた良忍の生涯と
念佛にまつわる霊験譚を記した絵巻

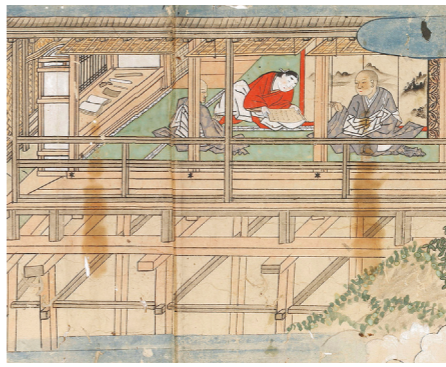
融通念仏縁起絵巻とは

この絵巻は、平安時代の僧・良忍の生涯と念仏の霊験譚を描いた上下巻の作品です。鎌倉時代末に最初の絵巻が作られて以後、江戸時代末まで多くの諸本が作られました。それぞれ時代に合わせアレンジが加えられたため、当時の生活や文化を知ることができません。松原市丹南にある融通念佛宗寺院の来迎寺・丹南本山来迎寺に伝わる絵巻は、南北朝時代に作られた絵巻を戦国時代に書き写したものです。

来迎寺の絵巻は、他の絵巻と場面(段)の順が部異なり、失われた場面もあるため、一般的に順に並び替えて紹介します。現在の並び順については、各場面説明文の文末に、上巻第1段であれば「上1」のように表記しています。

1 良忍の叡山修行と大原勤行

11才で比叡山に入り天台宗の僧となった良忍は、千日誦を成し遂げた後、23才で大原に籠り修行の日々を送ります。【上1】



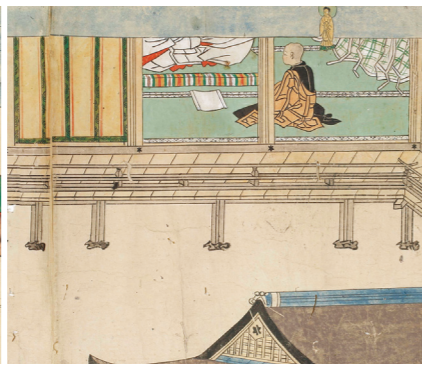
2 阿弥陀如来の念仏直授

良忍が46才となったある夏の屋どき、夢に現れた阿弥陀如来から皆で念仏を唱えることにより誰でも往生が叶う融通念仏の教えを授かります。【上2】



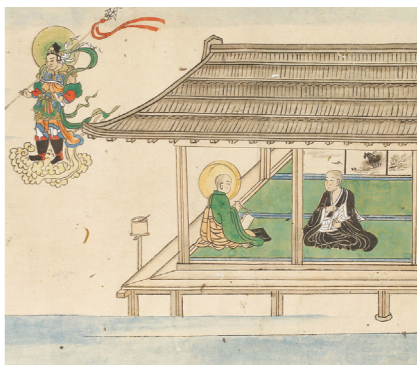
3 融通念仏の勧進開始

良忍は比叡山を離れ、念仏の教えを広め始めます。まず、鳥羽院と妃である待賢門院に念仏を勧進した後、身分の関係なく勧進を行い、念仏と縁を結んだ人々の名を次々に名帳へ記していきます。【上3】



4 毘沙門天の名帳加入

ある朝、良忍のもとに青衣をまとった僧が現れ、名帳への記帳を願います。僧が帰った後、名帳を見た良忍は僧の正体が毘沙門天であることを知ります。【上4】



5 良忍の鞍馬寺参籠

鞍馬寺に籠り徹夜で念仏を唱える良忍のもとに毘沙門天が現れます。他の神々も毎日百遍の念仏を唱える事を誓ったと伝え、神々が署名した巻物を渡します。【上5】



6 諸天諸神の名帳加入

良忍が受け取った巻物(神名帳)には、梵天や帝釈天などの諸天をはじめ仏法に帰依したインドと中国の神々の名が記されており、それに続けて北野天神など日本の神々の名も記されていました。【上6】



7 鳥類畜生の念仏結縁

活動を続ける良忍のもとに神だけでなく、畜生道に属する生き物までもが念仏と縁を結ぶために訪れます。絵では鷹と鼠が訪れる様子が描かれています。【上7】



8 良忍入滅

長承元年(1132)2月1日、良忍は60才で臨終します。亡くなった彼の周りには清らかな薫りが立ち込め、苔の上に紫雲がたなびき、迎える菩薩たちが現れます。【上8】



9 覚蔵の夢

ある夜、大原に住む覚蔵律師の夢に良忍が現れ、自分が最高の往生(上品上生)を遂げた事、そしてそれが融通念仏の力によるものであることを告げます。【上9】



10 鳥羽院の日課念仏増加

良忍の勧めにより鳥羽院は一日百遍の念仏を唱え続けてきましたが、信心が増し一日千遍に増やします。また、仕える僧達にも名帳への加入を勧めます。【上10】



11 広隆寺女院の念仏修行

鳥羽院の妃である待賢門院(藤原璋子)が法金剛院で百か日の融通念仏会を催します。そして、この寺に6人の僧を置き、以後も念仏会を続けさせます。【上11】



12 和泉前司道経女の入道と臨終

和泉前司道経の女子(妻又は娘)が良忍の元を訪れ、すぐさま剃髪し尼となりまします。その後、念仏を唱える日々を送り、亡くなる時には極楽浄土のある西に向かい手を合わせ往生を遂げます。【上12】



13 城南寺僧心源念仏により父母往生

城南寺の僧である心源が、父母への孝行のため毎日三千遍の念仏を唱える事を誓い日々励みます。その甲斐もあり、ある夜、ついに父母が往生を遂げた夢を見ます。【上13】



14 青木尼公の往生

青木の尼公が念仏衆に加わったことにより、みごとに往生を遂げます。【上14】



15 木寺源覚僧都の牛飼童の妻、念仏により難産を免れる

仁和寺の子院である木寺の僧・源覚に仕える牛飼いの妻が難産により命を落としかけます。しかし、念仏衆に加わった事で母子ともに助かり、この噂を耳にした人々が名帳に加入します。絵では、難産の原因として衝立の後ろから覗く赤い鬼が描かれています。【上15】



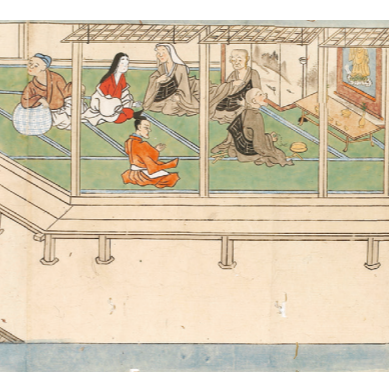
16 北白川の下僧の妻、閻魔庁から帰される

北白川に住む僧の妻が亡くなり地獄の閻魔庁に送られます。しかし、生前に毎日念仏三千遍を唱えていたことが判明したため、すぐさま現世に帰されます。【上16】



17 正嘉疫癘

鎌倉時代の正嘉年間、疫病が流行し、武蔵国与野郡の名主が疫病除けの念仏会を計画します。前日、名主は念仏会に疫神たちが押しかける夢を見ます。夢の中で疫神は名主に番帳(加入者名簿)を見せるよう迫り、加入者名の下に印を付けて立ち去ります。その後、加入が間に合わなかった名主の娘は疫病で亡くなりましたが、加入者はみな疫病から逃れることができました。そして、この番帳は評判を聞いた將軍家に召されました。【上17】



18 光明遍照

阿弥陀如来の放つ光は世を隈なく照らし、念仏を唱える者は身分に関係なく救われること、そして、念仏を一遍唱えることは、仏像を造るよりも大事で功德が大きいことを説きます。【上18】



絵巻の奥書に

残されたメッセージ

融通念仏縁起絵巻はどの時代のものにも最後に奥書が有り、制作者や奉納者の名前、そして目的などが記されています。来迎寺の絵巻には4つの奥書があり、最古の絵巻誕生から来迎寺に絵巻が寄進されるまでの約300年にわたりに込められたメッセージを読み取ることができます。

■第1の奥書

現存しない最古の絵巻に記された奥書を写したものです。まず初めに、絵巻は良忍(1073~1132)が勧進に使用した名帳を下敷きに作られたことを記し、次に良忍の死後も名帳は代々引き継がれ、今では多くの者が名帳に加入していると続いています。そして、絵巻に描かれた数々の霊験のとおりに念仏と縁を結び名帳に加入することで災難を祓い来世の往生が約束されると説きます。最後に、この絵巻が一般(在家)の男

女に念仏の教えを広める目的

で作られたものであることを述べ、「正和3年(1314)11月上旬にこれを記す」で筆を置いています。後の時代に作られた絵巻は、良忍の始めた念仏勧進とその志を正しく引き継いでいる事を示すためこの奥書を写しています。

正和3年の作とされる最古の絵巻は残されていませんが、鎌倉時代末の転写本がシカゴ美術館とクリーブランド美術館(左写真)に分かれて収蔵されており、最古の姿を知ることができます。



クリーブランド美術館(アメリカ合衆国)蔵

■第2の奥書

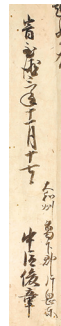
南北朝時代の永徳(至徳年間(1381~87))に良鎮(生没年不詳)という勧進聖が制作した絵巻の奥書で、来迎寺に伝わる絵巻の底本に記されていたものです。「永徳年中

良鎮沙門謹言」から始まり、彼が日本の北の果てである蝦夷(多々か嶋)から南の果ての硫黄島(いわうか嶋)まで全国に念仏の教えを広めるため、絵巻100本を制作したと記されています。また、この絵巻を見て念仏と縁を結んだ人々が記名した名帳を供養し、浄土信仰の聖地である當麻寺(奈良県葛城市)にある曼荼羅堂の本尊である當麻曼荼羅の瑠璃壇に納めると続いています。

良鎮が制作を試みた絵巻は上下巻あわせて30メートルにもなる長大なもので、これを約100本も作るためには多くの費用が必要でした。そこで、彼は大和国の賛同者から絵巻を寄進してもらうことで実現を目指しました。そのため、巻末には良鎮の奥書に続

けて寄進者の名前や寄進した

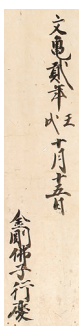
年などが記されています。来迎寺の絵巻には、中田俊章という大和州葛下郡片岡東の国人が母親を弔うため至徳3年(1386)に寄進したと記されています。



この時期に作られた絵巻は、絵や文章の表現がある程度自由にすることが許されており、来迎寺の絵巻はフリーア美術館蔵の絵巻(前頁の場面2・16)とも共通点がありますが、知恩院の所蔵する絵巻と最も表現が似ています。

■第3の奥書

底本となる絵巻から写された際の奥書です。室町時代の文亀2年(1502)に真言僧の行慶が主体となり写されたことが記されています。



先程の良鎮ですが、彼は手描きの絵巻100本を完成させた後、明徳2年(1391)に絵巻の木版画化に成功して

います。以後、絵巻が多く刷られたはずですが、良鎮が最初に手がけた絵巻も転写され重要な遺産として受け継がれたことがわかります。

■第4の奥書

江戸時代の元和9年(1623)に布忍清水村(現在の松原市南新町)の喜兵衛入道浄安により奉納された際に記された奥書です。

これに先立ち、来迎寺を開いたと伝わる法明(1279~1349)の物語を記した『融通大念仏縁起』が慶長5年(1600)に寄進されており、信仰集団の起源としての性格が生まれつつあったことがわかります。

